

伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う—現代移民研究の課題—』(有信堂、2007年)**

近代は移民の時代であると言われ、国境を越えた人の移動は急激に増えており、現在2億人近くが出生国や国籍のある国を離れて生活しているという。人の移動には様々な理由や要因が存在するが、世界の人口移動を概観してみると、世界経済システムに依る労働力、政治的な迫害による難民、旧宗主国へ向かう旧植民地からの移動、頭脳流出、留学など自己実現を求めて、国際結婚や家族の呼び寄せに応じて、などさまざまなかたちがみられる(駒井、1990: 20-24頁)。こうした動きに伴って、さまざまな学問分野で、人の移動や移民に関する実証面・理論面の調査・研究が行われ、膨大な数の著書・論文・報告書が刊行されてきた。森廣正によると、「外国人労働者」、「国際労働移動」、「移民」の3つのキーワードで大原社会問題研究所所蔵の関連文献を検索すると、2000年1月の時点で和書が689冊・論文数が2015論文と膨大な数にのぼったというが、現在でもその数は増え続けている(森、2002: 2頁)、(大久保、2005: 6頁)。さまざまなアプローチから移民研究がすすんでいく中、本書『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』は、その新しい視座を与える。

編者である伊豫谷登士翁は、日本を代表するグローバリゼーション、移動・移民の研究者であり、これまでも人の移動に関するすぐれた著書を発表してきたが、本書は『『グローバリゼーション』への関心から人の移動を再構成しようとする、あるいはこれまでの移民研究を学び捨てる(アンラーニング)ための試み』(3頁)であると位置づけられている。既存の研究における

「移動から定住へという歴史認識」「移動と定住は対立的で、定住が常態で移動がその逸脱」、または「移民は管理される、または管理すべき対象」という前提を乗り越えるため、「場所の非一決定を、移動あるいは移住、移民といった人の移動から問い直すこと」が本書の目的とされている(4-9頁)。

人の移動は、人類学、人口統計学、経済学、歴史学、法学、政治学、社会学など社会、人文諸科学の多くの研究領域において、さまざまなテーマとかわりながら論じられてきたが、それらの間で対話が行われてきたというわけではない。そのため、「これまでの移民研究と他の諸研究領域との対話を通じて、移民にかかわる研究のありかたを問い直し、人の移動を対象とする研究領域と他の幅広い研究領域との接点を広げる」(5頁)べく、移民・多文化主義、国際比較政治学、国際関係論、地域研究、ジェンダー研究、思想研究、クイア理論、ポストコロニアル研究など、幅広い分野の研究者が本書の執筆にあたっている。

本書は、序章と3部9章から構成されている。各章は、それぞれの筆者が「移動から場所を問う」べく、さまざまなテーマをとり上げているので、順を追って大まかな展開と論点を整理し紹介したい。第1部「越境する空間(移民のつくりだす場所)」は、第1章「存在論的移動のエスノグラフィー想像(イマジンド)でもなく複数調査地(マルチサイティッド)でもないディアスポラ研究について」(ハージ)、第2章「現われ出る移民国家」(ホリフィールド)、第3章「『沖

*中部大学人間安全保障研究センター研究員

**ISBN: 9784842065717

縄系移民』研究の展開と視座」(山下)から成っている。

第1章では、ハージ自身の4年間に及ぶレバノン系ディアスポラのエスノグラフィ調査を踏まえて、移民のエスノグラフィを中心とした分野で新たに流行している「複数調査地エスノグラフィ」(multi-sited ethnography)や、ディアスポラ研究における「想像の共同体」という「万能の鍵」に批判が加えられている。そして、移民自身、または移住を計画している人々の言説から「存在論的移動」が重要であると述べられ、「この分野のなかで社会的現実の複数性をエスノグラフィ的分析以上によりよく把握できるものはない」(47頁)、としている。

第2章は、第二次大戦終結以来の、ウェストファリア協定に基づいた要塞国家における、経済面の開放性と政治面の閉鎖性の逆説を説く「リベラル」・パラドックス(「自由主義的」逆説)について論じられ、国境を越えた人の移動は、主権の原則を侵しうるため、移民は国民国家の主権と権威への象徴的な問いかけになると主張されている。ホリフィールドは、「移民と貿易とがコインの両面のように分かちがたく結びついているために、通商国家の出現は必然的に移民国家の出現を招来する」(55頁)と説く。

第3章では、はじめに、沖縄は多くの移民を出しており、移民に対する関心が高いけれども、日系移民研究との同化のため、沖縄系移民研究が発表され始めたのは1980年以降であると指摘される。山下の、「『ヤマト』と『ウチナンチュ』の間の差異感とは何か」、「『沖縄系』とは何を意味してきたか」(86頁)という問題関心の下、これまでの沖縄系移民研究の展開と問題点が明らかにされる。実証研究では、既存の研究であまり触れられていなかった「国際関係と移民」とい

う視点から、ハワイの沖縄系移民について報告され、戦後沖縄問題と沖縄系移民の関わりが論じられる。

第2部「接続する空間(移民を結びつける場所)」は、第4章「人身売買の噂と移民研究の管理」(ウォン)、第5章「女はいつもホームにある—グローバルゼーションにおけるフィリピン女性家事労働者の国際移動」(パレーニャス)、第6章「女性化された移動と接続する場所—「家族」「国家」「市民社会」と交渉するトランスナショナルな移住女性」(ヨー)である。

第4章では、世界の主要な研究課題となっており、国際移民の一つのテーマとなった人身売買に関する言説(噂)が分析され、昨今の問題についての移民研究の政治的・政策的文脈が説明される。ウォンは、「人身売買の議論の中心は移民受入国の立場からみた移民管理にあり、そのような政策関心は移民研究における主要な課題となり、同時にゆがみをもたらしつつある」(109頁)と分析する。政策施行の移民研究への批判として、ヨーロッパの移民受け入れ国の政策的・政治的必要性という観点からの「問題設定」、難民や不法移民などの境界の概念的管理のため法律上、行政上生まれた「概念的装置」、方法論的ナショナリズムなどの「方法論的ゆがみ」、が取り上げられる。

第5章においては、フィリピン女性移住家事労働者の事例が取り上げられ、移動が移住女性の労働市場や家族におけるジェンダー平等向上を促すかどうかを検討される。移住女性の収入獲得力による解放はきわめて限られていると考えられ、再生産労働の国際分業、社会的再生産の負担、限定的なシティズンシップ、トランスナショナルな母親業からそれが論証される。パレーニャスは、「移動による女性の収入稼得力

上昇は、彼女たちの社会的再生産責任の軽減をもたらしなさい」(144頁)と結論する。

第6章は、まずフェミニストがトランスナショナルな視座について両義的な感覚を持ち続けている点に触れられた後、移動と主体性の問題を中心に捉えることの重要性について論じられる。ヨーは、「トランスナショナルな光学によって開かれる地平は、現代の社会生活を支える重要な諸概念『家族』『コミュニティ』『家庭/故郷』『ネーション』『アイデンティティ』『移動』などを再考する重要な機会を提供する」(151頁)と述べ、フェミニスト地理学において関心が寄せられる、①トランスナショナルな家族の形成と女性のアイデンティティの交渉、②トランスナショナルな移住女性と国民国家の関係性、③女性エージェンシーや運動とトランスナショナルな市民社会構築への挑戦、を分析する。

第3部「移動する空間(移民の変容する場所)」は、第7章「西洋と残余の文明的差異における多義性」(酒井)、第8章「アーバン・ディアスポラ ポスト・エスニック・ヨーロッパにおける人種、アイデンティティ、ポピュラー・カルチャー」(エル・タイェブ)、第9章「奴隷制廃止と『自由』移民―移民研究における史実性とヨーロッパ中心性について」(モンジア)となっている。

第7章は、西洋(と残余)という存在の様態は概念的多義性にある、という出発点から、いかにして西洋が存在するのかが問われる。西洋と残余の関係を理解しようとする際の『対話と差異』という点の有用性が指摘され、対話という観点からこの二項対立を理解してみればその多義的な本性が見えると述べられる。また、「西洋の同一性を定義するのに適切な資質などは存在しない」(191頁)と強調される。酒井は「対話

における差異を通じて西洋と残余の二項対立を対照化させることで、この主の対話は、そうした形一対象化をつねに裏切るものであることを明らかにすることができる」(196頁)と結論付ける。

第8章では、まず、今日のヨーロッパは、統合・グローバル化・再ナショナル化の間で、ナショナルおよび大陸的アイデンティティをめぐる言説の競合する場になっているが、とりわけアフリカ系や東方系の移民が脅威的な移民として語られているということについて触れられる。そして、マイノリティの運動家たちにとってどれほどポピュラー・カルチャーが重要であるかを検討するため、過去10年間のポピュラー・カルチャーにおけるマイノリティの表象の増加、移民のアイデンティティについての言説を規定する上でのメディアの役割についての分析がなされる。エル・タイェブは、「ヒップホップは、ポスト・エスニック・ヨーロッパのディアスポラのアイデンティティにとって、中核的な源泉になり、他民族的な都市部のコミュニティの状況に適切な戦略は、アメリカ大陸における、アフリカ系ディアスポラ・コミュニティの生き残りのなかに見出された」(226頁)、ということを明らかにした。

第9章は、「移動と主権と安全保障との規範的な関係の形成のなかに、コロニアリズムの構成要素的な影響力」(235頁)が描かれている。政治学や歴史学などの学問分野が本質的にヨーロッパのものとして構築されてきたことが指摘され、ヨーロッパ中心主義の結果、西ヨーロッパとアメリカ合衆国に移民規制の起源があること、国家は制限の論理のもと移民を規制するものである、という考えが移民研究者を支えていると述べられる。モンジアは、「あらゆる現象

は歴史的な組成物であるという考え方をとっている」「近代国家やそれに付随する主権の概念といった現象を、ヨーロッパ固有の組成物として理解することはできない」(256頁)という点を強く主張している。

まず「越境する空間」をとらえるべく、移民・ディアスポラ研究におけるエスノグラフィという方法論の適性、リベラル・パラドックスという理論の有効性、国際関係学の視点を取り入れた国際社会学的研究からの移民研究の可能性、について論じられるが、とりわけホリフィールドが、現代のグローバル化の中の国家が抱える矛盾をつき、「移民のつくりだす場所」をすどく描いている。次に「接続する空間」をつかむために、今日主要な研究課題となっている人身売買がどのように移民研究と結びついてきたのか、ジェンダー研究と移民研究がいかに結びつけられたか、そして移民研究におけるフェミニズム(地理学)とトランスナショナリズムがいかに交わるかについて議論されるが、中でもウォンの研究が、いかに移民研究が政策科学に傾斜してきているかということを説いており、「移民(研究)の結びつける場所」を示している。最後に「移動する空間」を把握すべく、西洋という存在(?), ポスト・エスニック・ヨーロッパのディアスポラのポピュラー・カルチャーによる変容、移民研究における史実性とヨーロッパ中心性について述べられるが、特にエル・タイエブのアーバン・ディアスポラの研究が「移民の変容する場所」を巧く描写している。しかしながら、本書でいう「空間(場所)」が、移民の存在的な空間と学問分野の認識的な空間の両方を指していることもあり、「越境する空間」「接続する空間」「移動する空間」の切り分けがクリアではないことは指摘されよう。本書の意図が「既

存の移民研究と他の諸研究領域の対話」であるならば、序章において、それぞれの内容と関係性が示されるべきではないだろうか。

参考文献

- 伊豫谷登士翁(2001)『グローバリゼーションと移民』有信堂高文社。
 大久保武(2005)『日系人の労働市場とエスニシティー 地方工業都市に就労する日系ブラジル人』御茶の水書房。
 駒井洋(1999)『日本の外国人移民』明石書店。
 森廣正(2002)「日本における外国人労働者問題の研究動向—文献を中心に—」『大原社会問題研究所雑誌』、第528号